

■日時：平成27年7月15日（水）午後1時30分～午後4時00分

■場所：吉野町中央公民館2階 第3・4研修室

■出席者：第3回吉野町まち・ひと・しごと創生推進会議 出席者名簿のとおり

1. 開会

2. 会長挨拶

■会長挨拶：

今日は第三回目の推進会議です。ワーキンググループが立ち上がって、今日はそのご報告があるとお聞きしています。地元の皆さんが主体となって、今回の会議が進められて、作られたものが、地元の皆さんが関わっていくようなものになっていくことが大事だと考えていますので、会議を通じて、また対話を通じて、その構想、それを実現していくということを主に進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

3. 案件

(1) 前回の議事録の確認

■事務局より、資料1、資料2をもとに説明。

■会長：資料1のとおり、公開対象の議事録とする。

(2) 各ワーキンググループの進捗状況の共有について

■事務局より、資料3をもとに説明。

■木工振興WG：

- ・木材関係の方で若い方を中心に集まってもらった。
- ・普段の仕事や生活の中で思っている問題点などをいくつか上げてもらった。
- ・一番木を使うところは、住宅、建物であるが、現在の建物は、木よりも人口製品を使うことが主流になっている。このような状況になっていることは、不思議なことではない。
- ・吉野町、近隣町村を中心として、たくさんの木がある。資源や先人が仕掛けてきた資産がある。これらをいかに活かしていくか。これを次の世代にいかに引き渡していくか。これを方向性として考えた。
- ・では、何をしていけばよいか。吉野自身が木を使うことを実践していかなければならない。
- ・木をどう使うか。使い方。単純に一般の分譲住宅など、フローリングをスギ、ヒノキに変えればよいか。風景を作っていかなければならないのではないかな。
- ・建築の一部分だけを置き変えるのでは、根本的な解決になってこないのではないかとこの意見もあった。
- ・家を建てることは一生に一度か二度のことで、費用もかかる。きっかけづくりからしていくということで、木工や木育などの最初の入り口が吉野にあるべきではないかという意見があった。
- ・木工や木育という入り口を通して、吉野自身が建物であったり、自分の住まいであったり、木の暮らしを実践していく必要がある。
- ・木を使う、木の暮らしということが漠然としているので、木の暮らしとは何かを次回の会議でもう

一度詰めましょうということになっている。

- ・目標をどう設定するのかという部分もあり、吉野材は日本の木材需要の何%くらい担っているのかという話が出て、一年間の新築着工数が90万戸ほどあり、持ち家が約3分の1でそれ以外が集合住宅などである。
- ・おそらく吉野材を使っている持ち家は、全体30万戸のうち、シェアとしては1%以下だと思う。多分0.5%くらい、約1,500戸ではないかと考えている。
- ・そう考えるとそれを2倍にすることが目標なのか、付加価値を付けて同じ1,500戸でも1戸あたりの売上げを1割、2割上げていく目標にするのか、そもそも住宅着工数が減っていくと言われている中、1,500戸を死守していくのか、そのあたりの目標をどう設定していくのかを次回の会議までに意見を出していくこととしている。

■木の子WG

- ・第1回目のWGを開催し、いろんな方が出席しているので、状況を説明した。
- ・経緯などを話した。ボランティアでは限界を感じてきている。
- ・今までは、電気代、水道代を社会福祉協議会などに負担してもらい、運営していた。
- ・現在14年目だが、3年ほど前から電気代、水道代を自分たちでまかない、自立してくださいと言われた。
- ・文庫は助成金などで運営してきた。自分たちで自立するための収入源は全く無かった。
- ・やめるかやめないか考えた時に、来ていただいた方にちょっとほっとしていただく場を提供して、お茶などを提供して、喜んでもらって、お金をいただく、経費をまかなうしくみをしてはどうかと、昨年はまちづくり交付金をいただいて、カフェスペースを作って、若いお母さんにも関わっていただいて、1年間やってきた。
- ・昨年1年間実施して一番大きかったことは、雑費を抜いて、3~4万円残るようになったこと。
- ・交付金の期間3年間あれば、何か形が見えてきて、何かしくみを作ってやっていけると感じた。
- ・若いお母さんや来てくれる方が、他町村からも増えてきた。
- ・5月ごろに始めた当初は、情報更新もあまりしていなかったが、木の子文庫のfacebookの「いいね」数が一桁だった。今は、友達から友達に広がって、記事によっては1,000を超える「いいね」数がある。
- ・今は、他町村から半分以上来られる日もある。今までは、木の子文庫を開けることに必死で、誰も来ない日もあった。吉野町だけの方を対象としている時は来られる方も限られていた。どうすれば人が増えるかは本当に苦労してきた。
- ・自分たちがやっていて楽しいことをやる。「絵本カフェ」という絵本の中に出てくるものやお菓子を作るなどをしていると来る人が固定したり、増えたりしてきた。誰も来ない日はなくなった。
- ・木村先生と5月にお会いし、文庫は今ある形を本当に自立していく形にするために、今やっていることの受け皿を広げていけばよいのではないかとことがWGの出発だった。
- ・第1回目のWGは、現状や実績を表に落とし込んで議論した。
- ・今まで、本を通じて人と地域をつなぐことを大事にしてきた。「本」は外せないと考えてきた。
- ・地元の皆さんが関わっていけるものとして、このWGがあって、文庫以外の関わりのある人に入ってもらって、文庫のことを考えてもらうことはどうかと思っていた。

- ・子どもに対してなど思うところがあって、客観的な意見もあり、自分たちでは出てこない意見もある。
- ・今までの話の中でいろんな「繋がる」や「楽しさ」などのキーワードが出てきた。
- ・「本を通じて人と地域をつなぐ」は、どの人にもわかる言葉だと思っていた。みんなで意見を出し合っ話しているときには、この言葉はわかりにくいのではないか、どんな言葉が良いかなど、意見を重ねて出てきた言葉が、木の子がみんなを繋いでいるという意見が出てきて、「木の子から人と人がつながるまちづくり」という言葉が出てきた。自分たちでは出てこない言葉に衝撃を受けた。
- ・これが意見を重ねて作っていくことだと少しわかった。このように一つずつ認識しながら、共有しながら考えていく方法があると教えてもらっている。
- ・明日、木村先生に入っただいて、今後もっと広げてやっっていくためには、メンバー・スタッフが足りないなどの問題が出てきているので、問題点に対して何が必要か、具体的なところを議論していきたい。

■国栖の里WG

- ・実際に物事を進めていくためには、それなりの役の人に入ってもらわないといけないということで、国栖区長会長と国栖自治会長、国栖の歴史の観点から国栖奏保存会、国栖の里ほりおこし会、国栖の里観光協会のメンバーに集まってもらっ、会議をした。
- ・まち・ひと・しごとは、国栖にとってすべてだと思っ。国栖のまち、国栖の人々、国栖の伝統産業について、これから具体的に決めていかなければならない。
- ・国栖に対するいろんな想いやいろんな現状を報告していただいた。
- ・今まで公的施設が国栖にあったが、今はない。それがなくなったことが、人が流出する要因になってきた、交通の便が悪い、若い方が出て行くため産業の後継者がいないなどの意見が出た。
- ・国栖にも国栖奏などの伝統行事があり、全国的で全国から人が来てくれるイベントもしている。国栖の太鼓踊りもあっだったので、どうにか復活していけないものかとの意見もあっ。
- ・国栖も美しい村連合に認められている。しかし、看板が一つ立っただけで、具体的な活動や地元の人々の理解も乏しいと思っ。何か活動をしていかないといけないと思っ。
- ・地場産業、歴史が豊富にある。これらを活用して、伝承していくためのイベントを考えていかなければならない。
- ・国栖のマップを作っしたが、それを拡大して大きく告知できる、見てもらえるような方法を考える。
- ・実際に歴史を語れる人、語りべを作っていかなければならない。年配の方のいろんな話を聞いて、町の学芸員の話も聞いて、地元の歴史を再認識する勉強会を立ち上げて、みんなが同じことをしゃべる、歴史についてみんなが統一してしゃべることができるように取り組んでいくことも必要。
- ・人がいる、何かをしているなという旗印を作っていかないといけない。
- ・国栖の小学校跡地をどうするか。最終的には、この問題の話になる。今後どのような形でやっっていくかということをお機会をいただいたので、いろんな意見をいただく中で情報を共有しながら進めていきたい。
- ・WG名は、「国栖の里のワーキンググループ」という名前で作る。目標は、3月31日現在で

1,003人なので、1,000人に国栖の里にとどまってもらい、迎え入れる、維持をしていくこと。子どもが少なくなっていくが、子どもの笑顔が見られる里にしていく。地場産業の活性化で里を元気にしていく。そうしていく中で、国栖の小学校跡地も考えていける。これから自分たちでする役割、行政がする役割など、分けていって進めていかないといけない。自分たちだけではできないところもある。行政の力を借りるところは借りてやっていこうということで話がまとまった。

- ・国栖の里観光協会の大きなイベントは、国栖の里灯りしかない。去年は台風でできなかった。今年は、10月10日（土）午後2時から午後8時まで行う。作品は、毎年グレードアップしてすぐにでも売れそうなものもある。そこで商品開発もしていただければいいとも思う。イベントは、みんなが楽しまないと続かない。みんなが楽しんで和気あいあいと国栖の人が集まって、いろんな話をして、国栖をどうするか考えないかなどのお話になれば、いい機会にもなる。作品も募集しているので、皆さんも出展していただいて、ぜひ参加していただきたいと思う。

■事業継承 WG

- ・リーダーが欠席のため、事務局より状況を報告する。
- ・1回目の会議は終わっていない。WGのメンバーを報告いただいている。
- ・第1回目の日程は決定している。第1回目の会議の報告は、次回リーダーからしていただく。進捗状況は以上である。

■スポーツ推進 WG

- ・人数は少ないが、第1回目の打合せをさせていただいた。
- ・現状の問題点の洗い出しをし、会議ではなく、おしゃべりの延長でやろうと始めている。
- ・子どもがしたいスポーツができないという現状で、他町村との連携が必要である。
- ・小学校の統合で歩く機会が少なくなった。他のスクールバスに頼っている地域では、子どもの体力が落ち、よくケガをするようになってきているという話も聞く。
- ・他団体との連携をはかるために行政間の話があれば、民間同士連携もしやすいとの意見もあった。
- ・スポーツといっしょにおはなしも絡めて進めていけば良いのではないかとの意見もあった。
- ・吉野町は高齢化が進んでいるが、高齢者が増えたら福祉のコストが増えると思ったが、それを心配するよりも元気な高齢者が増えて、高齢者の方が終末を迎えるまで元気で過ごせる環境をつくる。そういった環境はかえて良いのではないかとの意見もあった。
- ・それもひとつのやり方ではないか。元気な高齢者を最後まで守っていくには、やはりスポーツがいい。その中におはなし会も組み入れていければという話が出ていた。
- ・外から見ても、吉野町は本当に高齢者にとって、住みやすい優しいまちだと見えてくれば、高齢者の方と子どもや家族がいっしょになって、吉野に来てくれることも可能性としてはある。福祉のコストの問題よりもプラスの面のほうが多いかもしれない。
- ・子どもの学校への送り迎えなどで親御さんが他の事に手がまわらないという環境も考えられる。近所の子どもを元気な高齢者が見ていたという昔の良い環境を生み出すことも良いのではないか。地域の関わりで若い世代にとっても魅力のあるまち、それが反対に高齢者にとって住みやすい、生きがいのあるまちになるではないか。そのようなまちづくりもわかりやすく、実現の可能性

も大きいと思う。

- ・おはなし会だけで高齢者におはなしを聞いてもらうには30分が限度。それにスポーツを組み合わせ、例えばグランドゴルフの後におはなし会を聞いてもらう。子どもと高齢者がいっしょにおはなしを聞くなど、いろんなアイディアでバラエティも出てくると思う。
- ・高齢者施設を見ても画一的なことしかやっていない。男性の中でお手玉などをするのが嫌だと言って、施設に入らない人も多いとテレビでやっていた。ある施設では、麻雀や将棋、囲碁などができる環境を作り、男性の入所者数が増加し、男性の比率が女性よりも増えたところがある。やりたいことをやらせてあげるという環境づくりが大事だと思う。高齢者施設だけではなく、やりたいことは何か、しっかりと把握していくことが重要。元気な高齢者でいられるためにどういう環境が必要なのか、これから会議の中で探っていきたいと思う。
- ・町のスポーツ推進委員がウォーキング事業に関わっているが、推進委員の仕事はそれを世話することではなく、自分たちが提案して作りあげて、どこかに渡していくことが大事である。また、次の事業をしていくことが仕事である。ウォーキングも発展性がなくなっているが、推進委員の意見を聞きながら進めていきたい。
- ・保健センターでは、子どもが歯磨きの後でフッ素加工をした場合、30分ほど待ってもらわないといけない。その30分の間におはなし会をしてもらっている。
- ・障がい者に対して、どのようなスポーツ環境があるのかとの意見もあった。以前は町内でも障がい者がスポーツをできる機会があったが、町内ではなくなり、吉野郡でのみやっている状況である。スポーツを通じては、障がい者の部分まで考えていく必要があると思う。

■会長：

- ・ワーキンググループの代表者に報告をしていただいた。
- ・ワーキンググループの内容や、今の報告に関する質問などを受け付ける。
また、発言していない委員に一人ずつご発言をお願いする。

■委員：

- ・1回目の会合では顔合わせを行い、課題を出し合い、これから議論していこうとスタートラインに立ったところである。
- ・具体的な対策をWG、この推進会議の中で議論していく。

■委員：

- ・会議に出席し、いくつかのキーワードが出ていたので、それを進めていく。

■委員：

- ・全てのWGで課題なり、たくさんあることに驚いている。
- ・一つずつ片付けながら、みんなで協力していきたい。

■委員：

- ・所属するWGは、日程が合わず8月3日に第1回ということで他のグループに遅れをとったが、

第1回の会議では、全てのメンバーが揃うと思うので、積極的な意見交換をして、遅れを取り戻したいと思う。

■委員：

- ・木工振興 WG にものすごく興味がある。製箸組合として、貯木の業界の方がどのように考えているか、情報を得られることに興味がある。
- ・今日の話それぞれの分野で持ち帰って話をするだけでは、井の中の蛙になってしまう。
- ・この場で話を広げて、意見をもらうことは重要である。国栖の里 WG も井の中の蛙にならないようにどんどん話を聞きたいと思う。

■委員：

- ・吉野町だけでは子どもたちに思いっきりスポーツをさせてあげられない、行政枠を超えていかなければならないという意見は、自分たちの活動においても感じているところであり、また、スポーツクラブの活動は、高齢者についてもいろいろ考えておられて共感した。
- ・スポーツとおはなしでは、対局のようなものだが、第1回の打合せでいろんなお話を聞かせていただいて、その中で一つでも二つでも実現できるものがあれば良いと思う。

■奈良県南部東部振興課：

- ・皆様の WG の進捗状況を聞かせていただいた。
- ・県、行政としての立場として、国栖の里 WG で話のあった行政と地元の役割は違うと思う。往々にして行政はやってほしいと言うことがある。
- ・地元としてこういうことがやりたいが、行政として支援できることはないかという形で、行政と地元の役割が形成されていくのではないかと考える。口で言うことは簡単だが、なかなか難しいと思う。
- ・町ないし県ができるだけ今回の議論をされている皆様のような地域団体に入り込んで、何を求めておられるのかを吸い上げて、反映させていければと思う。
- ・WG の中で話し合っていられる中で目標が一つでも決まり、その目標に向かって事業を実施していければ、まちづくりに役立つと思う。
- ・推進会議の場で WG の結果を共有することにより、一つの WG で詰まることがあっても、他の WG から助言をもらうこともできる。

■会長：

- ・できないをどうすればできるかを考える。よく行政は、できるをできないに変える。できる方法を考えなければならない。
- ・WG も冊子を作るために集まっては意味がない。どういう風にすればできるかを考えなければならない。
- ・地元の皆さんが、こういう課題を抱えているが、そこを乗り越えて、地方創生総合戦略、人口ビジョンの中で自分も関わり、皆さんと一緒に作っていきたくない限りは冊子づくりで終わってしまう。

- ・私に関わる地域では、具体的に一つでも二つでも推進していく。そこを推進するためには、構想するだけではなく、実践するためにどこが課題になっているかを知る必要がある。
- ・実は、国にも県にもメニューは揃えてある。知らないのか、知る思いがないのか。補助金を使うことが良いか悪いかではなく、自分たちの計画の中で活用できるものは、活用する。この中で企画したものに対して、メニューを創出する、提言することも一つある。
- ・木工振興 WG については、五感を働かせることが大事だと思っている。その中で六育を推進しているが、風土、風景を話の中で感じた。雑誌は、頭に残るもので HP やフェイスブックもある。WG 毎のフェイスブックページなどを作って行って、お互いに共有していくこともある。
- ・目配り、気配り、心配りの中で木の暮らしについて考えていく。
- ・木の子文庫は14年目になるということはずいと感じる。継続していくことは難しいことで、もう少しランクを上げる、法人化することも考えていく。フェイスブックのアクセス件数が伸びているが、目標数値を立てつつ、励ましあって一つでもアップしていくことも大事。
- ・7月下旬にみんなの図書館の川端代表を呼んでいるので、会っていただいて、その中で話をさせていただきたいと思う。みんなの図書館ということでみんなで作りあげていく図書館を全国展開している。一つのヒントが得られるのではないかと思う。
- ・国栖の里 WG は、私自身も実践したことがあるまちの道しるべ、まちの語りべ養成は、学芸員の方に各地域の歴史や文化などを調査してもらう。実際にやる時には、史述に基づいた内容、吉野ならではの歴史、文化があるので、そこを大切にしながら、研修も実施し、一つのことを話せるようにまちの語りべになってもらう。それに基づいて、まちのマップを作る。そのマップを元に看板を共通にしてはどうかなど、展開していける。ソフトからハードへという形が作れると思う。
- ・国栖小学校跡地については、いろいろ議論していくことがあると思うが、10年ほど今のままになっていることは、もったいないと思う。被災地の1万haの土地で微生物を使って再生した方がいる。協力体制を取ってもらえるか確認しようと思っている。その方と組めるのであれば、野菜を作るなりできる。ただし、地元の方が出資するなり、関わらないと意味がない。地域づくりで大切なこととして、ボランティアはあり得ないと考えている。売上げ所得を押し上げていく。そのようなことができると考えている。
- ・スポーツ振興では、グランドゴルフを毎朝100名程度やっているか。

■委員：

- ・毎週月曜日に100人～110人の方が参加している。弓道のインターハイを吉野町で行うにあたり、グランドの側溝の砂出しを男性が全員でやってくれた。
- ・今、吉野町でいろんなことで活躍してくれているのは、高齢者の方だと感じる。

■会長：

- ・100人～110人の方は、吉野町民の方か。

■委員：

- ・約10名が大淀町、約5名が東吉野村の方でそれ以外は、吉野町の方である。

■会長：

- ・人口約8,000人のうち、約100名の高齢者が関わっている。これは大きい数字だ。

■委員：

- ・これらの方は、吉野スポーツクラブの会員に入ってくれている。全会員では、約500人。サポーター会員が約200人いる。

■会長：

- ・スポーツクラブと保健師と福祉介護施設が連携をした回想法などの取り組みで認知症予防のための指導員になっていただいて、各地域で認知症予防のための回想法を学ぶ機会を作ってもらおう。また、インターネットなどを活用して、お互いに情報交換をしあう。グランドゴルフもあるし、その中で釣りや登山などのグループを作っていく。小樽でシニアネットを概ね60歳以上の方で70人で発足した。今は、180人になっている。この方々が移住してきたいという方の受け皿になっている。夫婦で移住してきても孤立してしまう可能性がある。年に2回シニアネットの集まる会がある。集まる前にそれぞれの釣りや登山の仲間が集まる。シニアが動くと経済が動くと考えている。集まると食事しようとか、今後どこへ行こうという話になる。昼から発表会を行い、そこからカラオケに行ったりする。1日5,000円ほど消費し、年に2回180人が集まるので、結構な消費になる。地元の方が和気藹々と楽しんで、スポーツを通じて知り合えるなどの動きが大切である。

■委員：

- ・クラブとしてバスを購入して、運動の後に買い物に行くなどの活用を検討した。例えば、体操をして、普段行けないような場所にいっしょに行くなどのアイディアもあったが、いろんな問題があってできない。そこで止まってしまった話もある。

■会長：

- ・買い物など、足腰がつかったら変わりに買ってきてあげると本人のリハビリにならない。足腰はつらいだろうけど、いっしょに行こうということがコミュニティとコミュニケーションになる。それが大事。
- ・絆と自分で物を選ぶ喜びを得ることができる。子どもが見た時にやっぱり支えていけないといけなと感じる。やっぱりこのまちがあつたかくていいなと思う。ちゃんと支え合って、お互い様だからと感じる。0歳から100歳までのコミュニティとコミュニケーションづくりをしようと進めている。自治会に入って、お互い様の関係を作ること。
- ・自治会の加入率が、6割を切っている自治会もある。災害のときに住んでいるか住んでないかわからないと助かる人が助からない可能性もある。そういう意味でも説得ではなく、納得理解していただいて進めていけないといけないことである。
- ・事業継承WGは8月にするとのことだが、後継者がいないがために1年間で50社廃業しているところがある。地元の大切な事業をいかに継承していくかは非常に重要である。

■委員：

- ・高齢者のコストと高齢者が元気に過ごせるまちづくりについて、行政としてどう考えるか。

元気な高齢者を多くしていきたいと考えている。それが良いということであれば、自信をもって進めていくことができる。

■事務局：

- ・元気な高齢者の方に来ていただいて、地域で活躍していただけるのであれば大変ありがたい。支障もないと思う。
- ・その方が疾病になったときなど、全体的に介護保険料が高くなっていく可能性が高いとは言われている。

■委員：

- ・病院に行くことや介護施設に入る期間が短くなるような活動を目指していければと思っている。
- ・毎週グランドゴルフに参加してくれている約110名の平均年齢は70歳代後半である。

■会長：

- ・通常、15歳から64歳が生産年齢人口、65歳以上が老年人口、75歳以上が後期高齢者と言われる。

■委員：

- ・グランドゴルフに参加してくれている高齢者の方は溝から砂を上げて、一輪車で運んでくれる。そのような方、元気な高齢者の方を増やしていきたいと思っている。スポーツや読み聞かせも含めて、一緒にやっていく。

■委員：

- ・中学校では、吉野の木を使った机を使用している。
- ・今年の3学期、近隣ではインフルエンザで学級閉鎖などが多くあったが、吉野中学校では学級閉鎖を行うことなく、インフルエンザにかかる子どもたちも数人程度であった。
- ・受験という3年生のこともあるが、無事4月を迎えることができた。
- ・木を使うこととそのあたりが何か関連性があればと思う。

■事務局：

- ・貯木の木工振興WGでは、「木から元気の気へ」との話もあったので、良い材料かと思う。
- ・もう少し研究できれば良いと感じる。

■会長：

- ・全国的にも木で作った校舎は少ない。木を使うことで、風邪などによって集団で休まざるを得ない環境が改善されている例もある。
- ・全てのところに木を使わなくても壁などに使用するだけでも効果が見込まれている。

■委員：

- ・ 昨年の夏に木の机を導入していただいた。
- ・ 導入したときには、教室中にかなりの桧の香りがしていた。学校ではにおいが心配で換気をするなどの対応で登校日に備えたが、自然のにおいということで子どもたちも気にすることなく、スタートすることができた。
- ・ あれだけのにおいを発散しているので、何らかの自然林がもつ防かび作用などもあるかを感じる。
- ・ 年月が経過すればその作用も落ちると思うが、机の天板は3年に1度変えていただけている。科学的な分析などが出来れば良いとも思う。木を使わせていただいて感じる場所である。

■委員：

- ・ 国栖の里 WG のメンバーが国栖の方しか入ってないようだが、外から国栖を見た視点などは必要かどうか。

■委員：

- ・ 女性の方を探していた。男性ばかりではなく、特に食などをテーマにしたときに女性の方の意見もほしいと思っている。

■委員：

- ・ 国栖と吉野山は、その地域で固まっているイメージがあるので、外から入ってもらいたいものではないかと思う。

■委員：

- ・ オープンではいる。外から入っていただける方もほしいと思っている。

■委員：

- ・ 商工会の会議があったが、商工会の若手を中心に補助金の申請を行おうとしている。
- ・ 補助金目当てではないが、補助金があつてできることもある。
- ・ 奈良県内では、吉野町商工会が補助金の申請数が一番多い。
- ・ 若い方が積極的に展開している。
- ・ しかし、そのような情報が今までなかった。ここ数年で情報を仕入れることができるようになって若い方が積極的に活用しようと動いている。

■委員：

- ・ 木を使ってきている工務店が、こちらで使うよりも良い使い方をしてきている。
- ・ スキルアップのために実際に現場に行って勉強しないといけない。そのために申請している補助金がある。

■委員：

- ・ 家に関わる異業種が集まって、一つのものを作っていくという形が少しずつ出てきている。
- ・ 今までには、なかなかなかった動きをしている。

■会長：

- ・まちの中で8,000人の方が住んでいるので、何かシンポジウムや勉強会などでただ出席して、知り合わないで帰っていくのではもったいない。
- ・こういう場やワーキンググループを活用したり、地域の方も入っていただく場の中で、知り合っていないだけで、どういう視点が必要なのか、お互いに気づいていくことが大事である。

(3) アンケート調査結果について

■事務局より、資料4をもとに説明。

■会長：

- ・住民票は吉野町にあるが、実際には住んでおられない方もいらっしゃるなので回収率は低いが、一定の傾向は見られると思う。
- ・これを参考にさせていただいて、推進会議、ワーキンググループ会議を進めていただければと思う。

(4) その他

■その他連絡事項等

◎事務局：

- ・次回開催日時 8月18日(火) 午後1時30分～
- ・委員報酬の振り込み先口座を次回会議までに報告をお願いします。